

社会のニーズに応え／ニーズを与える大学

教職員・社会を巻き込んだ大学教育の包括的な改善としてのFD

都市教養学部経営学系助教

木佐森 健司

本学において、FDは「教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取り組みの総称」として定義されており、私自身も、FDセミナーへ参加するに先だって、FDを、あくまで教員が授業内容をどのように改善するのかという、限定した取り組みと考えていた。しかし、本年度のFDセミナーは授業内容・方法を改善するというテクニカルな側面にだけ注目するのではなく、大学という組織を運営することについて包括的な観点から徹底して再検討することに軸足が置かれていた。

この趣旨のもとで開催された三つの講演、ガイダンス、ワークショップでは多くを考えさせられ、また学ぶことができた。「基礎・教養教育における検討課題」では、基礎・教養教育における検討課題と現状に関する詳細な説明、「生きるための大学」では、社会学的な分析を踏まえた学生のアイデンティティの変化と近年の動向についてお教え頂き、大学教育をめぐる状況を多面的に把握することができた。この理解を踏まえ、二日目は「今、大学教員に求められている資質とは？」と題されたガイダンスとワークショップが開催された。

一連のプログラムでは、さまざまな点を学ばせて頂くと同時に、ディスカッションの中で先生方の多様な立場のご意見を伺う中で、諸先生方が真剣に、首都大学の教育の在り方を考え、また実際に取り組んでおられることを伺い、私自身も、より真剣に、こういった改善に携わってゆく必要がある、との思いを新たにしました。

一連のセミナーの中で特に学ばせて頂いたことは(a) 大学とは教員と学生のためだけにあるのではなく広く社会のためにあること、(b) 大学は社会のニーズへ応えると同時にニーズを与えようような研究・教育を行う必要がある、大学教育の包括的な改善はこういった目的の実現を目指して行われることが大切であり、私自身もそういった改善を担っていく必要があることである。

セミナー一日目の「教育研究と経営の質の持続的向上に向けて」と題された講演では、大学の教育研究を考える上で、次の点が重要なポイントとして取り上げ

られた。それは、大学の教育を、より広い視野から捉える必要性である。大学は確かに、教員と学生のものである。しかし大学は同時に、そういった学生や、教員を必要とする社会のものでもある。この観点に立つと、大学経営は学生のニーズだけではなく、広く「社会」のニーズに応えるべく行われる必要があることになる。

ただし、吉武氏は上の点に加え、次の二つを考えてゆくことが更に重要であると指摘された。ひとつは、ここでニーズに応えるべき「社会」とは一体何か、ということである。日本という社会なのか、特定の産業界を対象とした社会なのか、社会という言葉で示される対象は極めて多様である。そのため、学生のためだけではなく、社会のための大学を目指すべきではあるが、そこでニーズに応えるべき社会がどのような社会なのか、このことをしっかり考える必要性が指摘された。

もう一つは、ただ「社会」や学生のニーズにこたえればよいのではないという点である。確かにそういったニーズに応えることは重要であるが、そういったニーズを見ている限り、既知の人材しか供給できない。大学はむしろ、そういった既知の人材を供給するだけではなく、それまでは想定されてこなかったような新たな人材をも供給できるようになる必要があることが指摘された。

吉武氏の指摘を踏まえれば、そもそも大学の教育は(a) 広く社会のもとで考える必要があり、そのためには教職員だけではなく、FDは社会をも巻き込んだ包括的な改善として行われる必要がある。(b) 更に、大学における教育は社会のニーズに応えるだけではなく、社会で必要とされるニーズを「与える」教育である必要がある。FDを授業内容・方法を改善するというテクニカルな側面から理解していた私にとって、同氏の指摘は私の視野を広げてくださるものであった。

FDセミナーに参加させて頂かなければ、諸先生方の取り組みを直に伺い、こういった問題を改めて考えるということは、なかったように思います。私にこういったことを考える機会を提供して下さったFD委員の先生方、事務スタッフの皆様にご感謝申し上げます。